

18) 中年期の精神障害について

一大学外来臨床統計調査より一

幸村 尚史・小林 慎一 (新潟大学精神科)
 佐藤 新・佐藤 哲哉
 坂戸 薫 (こばり病院)

中年期は旧くから精神障害の好発期として知られてきた。しかし中年期の精神障害の一般的な特徴、例えば臨床統計的に青壮年期あるいは老年期の精神障害とどう異なっているかについては、これまで十分には明らかにされていなかったと言えるであろう。

我々は昭和58年7月1日から同年12月31日までに新潟大学医学部附属病院精神科を初診した患者を対象とした外来臨床統計から、中年期の精神障害に関する所見をいくつか得た。今回はその一部について若干の考察を加えて報告した。

得られた所見は次のとおりである。

- (1) 精神障害や神経症類型の診断分布は、中年期以降それぞれ単極性うつ病、神経症および不安心気神経症へと限定化し、その多彩さを減弱させる傾向があった。この診断分布の限定化はとくに女性で著しかった。
- (2) 中年期に精神障害総数に対する比率を増加させるものは単極性うつ病、両極性うつ病、アルコール依存であり、逆に比率を減ずるものは分裂病、神経症性うつ病であった。神経症と非分裂病性幻覚妄想状態は、各年齢層で平均した比率を示した。
- (3) 中年期に神経症総数に対する比率を増加させる神経症類型は不安であり、逆に比率を減ずるものは恐怖、強迫であった。しかし男性の恐怖、強迫は中年期にも比率をほとんど減じなかった。心気神経症は老年期で比率を増加させ、ヒステリーは各年齢層で平均した比率を示した。

次にこれらの所見について若干の考察を行った。

- (1) 両極性うつ病が中年期に比較的多く見られるが、これは両極性うつ病のうち、意外に多い数が中年期に初発すること、若年層にうつ病相で初発したものの中年期前後に初めて躁病相を呈する例や中年期に躁病相を頻発させる例が多いことなどによるものと考えられた。
- (2) 加齢に伴う診断分布の限定化には、生物学的な意味での加齢の他、社会に長期にわたって所属していることによる葛藤の画一化が関連していると考えられた。このことからすれば心理構造が社会から強く影響を受けた者ほど中年期に精神障害に陥りやすいと推定された。女性では、この葛藤の画一化が男性に比しより早期から生ずる傾向が示唆された。

19) アルコール依存症の予後調査

稲井 徳栄・勝井 丈美 (河渡病院)
 西田 牧衛・和泉 貞次

河渡病院は新潟県内唯一のアルコール専門病棟88床を持つ精神病院である。そこでは、16週間の入院治療を行い、年間退院者数は約220名である。われわれは、アルコール依存症の入院治療の内容を紹介し、退院後の予後を調べたので報告した。

入院患者及び家族に対して研修のしおりを配布し、アルコール依存症という病気の理解を深めるようにしている。治療は研修プログラムにのっとり、輪読会、グループミーティング、酒歴発表、退院決意発表、完歩(行軍)、坐禅研修、院内断酒会、OBゼミナール、AAミーティングなどがあり、その他に、毎月第3日曜日に院内で月例断酒会を開催したり、夜間や日曜日に地域断酒会に参加してもらうというシステムをとっている。

昭和58年11月～60年10月までに退院したアルコール依存症男子患者延べ436名を対象とし、そのうち2回以上の入院及び死亡者を除き、最終的には345名を研究対象とし、昭和61年7月～12月に予後に関するアンケート調査を郵送し、無記名で回答してもらい、155名(44.9%)の回答が得られた。

その結果、完全断酒者は50名(32.3%)存在した。しかし反対に入院前の飲酒状況と同じや入院前に比べて悪化したをあわせると47名(30.3%)も存在し、アルコール治療の難しさを痛感させられた。この断酒率32.3%は、今までに発表された予後調査の約20%という数字を上回るものであった。また外来通院については、きちんと通院している人が15.5%、地域断酒会へ毎回参加している人が14.2%と少なかったが、その意義を認めている者は相当存在することがわかった。

今後は予後と患者側の要因及び治療内容との関係について調べ、その結果を基に治療成績を上げることが、われわれの責務であると思われる。

20) 松之山町における在宅老人を対象とした
老年期うつ病の予後調査

小熊 隆夫・佐藤 新 (新潟大学精神科)
 滝沢 謙二・内藤 明彦
 若穂開 徹 (五日町病院)
 森田 昌宏 (白根緑ヶ丘病院)
 須賀 良一 (厚生連中条病院
精神科)
 小泉 毅 (精神衛生センター)

我々は、昭和60年より東頸城郡松之山町をモデル地区として老年期うつ病の研究を開始した。本年も同地区に

において在宅老人を対象としたうつ病の疫学調査を行ったので、その概要を報告する。次に、うつ病と診断された老人の予後に焦点をあてて報告する。

本年度の調査概要を以下に示す。調査対象は、65才以上の910人の在宅老人であった。調査方法は、まず、全対象者にうつ病自己評価尺度(SDS)を配布、回収し採点した。次に SDS が60点以上の者と、過去にうつ病のエピソードを有する者に限って診断面接を行った。その際にうつ病の診断基準として、研究用診断基準(RDC)を用いた。調査の結果24人の Major Depression と 9人の Minor Depression が発見された。診断面接する者を限定した点で、60年、61年の調査方法と違いはあったが、本年度の Major Depression の推定有病率は3.17%で、60年、61年の調査結果と近似していた。

次に、60年、61年の過去2年間にうつ病と診断された老人の予後について以下にしめす。① Minor Depression の寛解する率が Major Depression の寛解する率よりも高い傾向があった。② Major Depression の死亡率は Minor Depression の死亡率より高い傾向があった。③ 60年にうつ病と診断された老人の1年

予後と、61年にうつ病と診断された老人の1年予後は近似していた。④ 1年予後においては、Major Depression と診断された者の約1/3が寛解していた。⑤ 60年に Depression と診断され2年経過した時点でも Depression と診断された者には、慢性化したうつ病と、再発したうつ病が混在していた。⑥ Major Depression, Minor Depression とも、寛解した者はそのほとんどが1年以内に寛解していた。⑦ 寛解した者の大多数は自然寛解であった。以上が、うつ病と診断された老人の予後結果のまとめである。

これまで population study による老年期うつ病の予後、自然経過についての報告をした文献はあまりみられていない。その意味でも今後さらに疫学調査を重ねて老年期うつ病の研究を進めていきたいと思っている。

特 別 講 演

児童精神科診療の現状と問題点

国立仙台病院長

白橋 宏一郎先生